

ただいま調査中！ 1万年前の”植物利用”

発掘した竪穴住居跡の床などの土をフルイにかけて洗ったところ、調理などで焦げた植物の種子・果実(炭化種実)が沢山みつかった。

さらに、土器をよく観察すると、作られる途中で粘土に入り込んだ植物の種子・果実のあと(圧痕)が残っていた。植物だけではなく、コクゾウムシという害虫の圧痕もある。これから詳しく調べていくことで、約1万年前にどんな植物を利用していたのか、食べ物や味付け、当時の植生(植物が生えていた環境)などもわかるのではと期待が広がる。



フルイがけ・水洗した土から微細な種子や果実を選り分ける



土器についた種子・果実のあと(圧痕)

圧痕をシリコンで型取り(レプリカ作製)
レプリカを顕微鏡で観察
植物の種類を調べる



取掛西貝塚だけじゃない！ ”市内最古”のバイオリン形土偶



縄文時代早期で、取掛西貝塚よりも古い土偶(約1万1千年前)が、市内の小室上台遺跡で出土している。手乗りサイズのシンプルな見た目がとても丁寧な作りで、さまざまな折りが込められたらう。

編集・発行：船橋市教育委員会生涯学習部文化課
令和2(2020)年3月30日発行
千葉県船橋市湊町2-10-25
電話：047-436-2887

取掛西貝塚について
Facebookでも情報発信中です！



千葉県
船橋市

国史跡をめざして…

取掛西貝塚

1万年前の貝塚からみえる暮らしと環境

Torikake Nishi Kaizuka

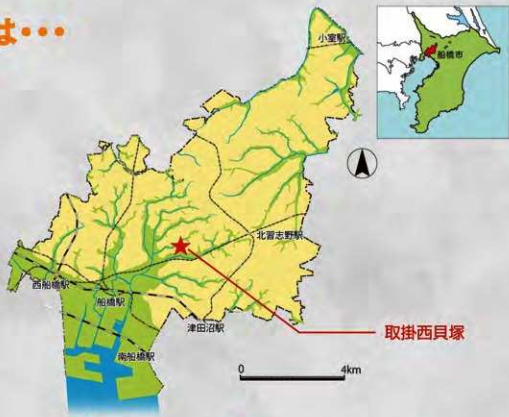


とりかけにしかいづか 取掛西貝塚とは・・・

取掛西貝塚は、千葉県船橋市の飯山清町と米ヶ崎町に所在する遺跡だ。標高約25mの台地の上で東西500mに広がり、約76,000㎡（東京ドームの約1.6倍）の面積をもつ。

これまでの調査で、全国的にも貴重な遺跡であることがわかってきたので、船橋市では遺跡を将来に保存するため、国史跡への指定を目指して調査・研究を進めている。

このパンフレットでは、取掛西貝塚を知るうえで、主なポイントを紹介していきたい。



赤い▼は、取掛西貝塚で見つかった竪穴住居跡や土器などの主な時期を示している



上空からみた取掛西貝塚（東側から撮影）



約1万年前の竪穴住居跡（白線は住居の壁があった跡）

約1万年前の ”関東最大級”のムラがあった

取掛西貝塚では、これまで8回の調査が行われ、年表の▼がある時代のムラの跡などが発見されている。

なかでも、縄文時代早期前期（約1万年前）は、竪穴住居跡が50軒以上も発見されており、そのうち6軒は、食べたあとの貝殻などを捨てた場所＝貝塚としても利用されていた。

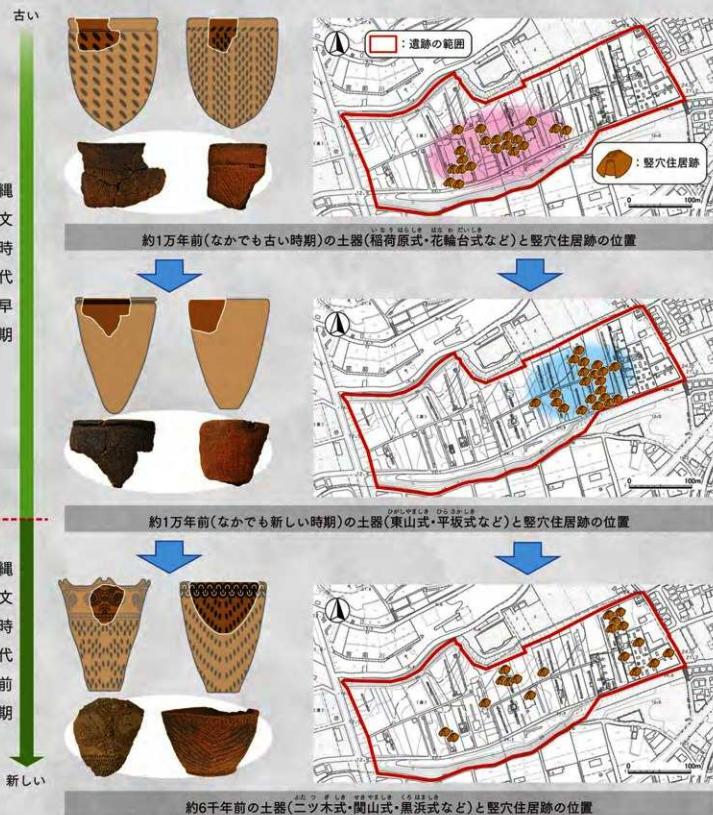
柱や屋根の構造など、どんな建物があったかはまだはっきりとわからないが、約1万年前の貝塚をとまなうムラはとて珍しく、そのなかでは関東地方でも最大級の規模のムラといえるだろう。

定住生活のはじまり？ 取掛西ムラの移り変わり・・・

旧石器時代、日本列島にいた人々は動物の群れを追いかけて、狩りをしながら「移動する」生活をしていたと考えられている。では、その後の生活は・・・？

取掛西貝塚における約1万年前の住居の分布をみると、最初は台地の西の方に集まっていたのが、その後は東の方に集中している。移動生活をやめて、一定期間ここに住み、ムラの近くで食べ物をとる生活へと変わった・・・「定住生活」を始めた頃のムラだったのかもしれない。

考古学では、遺跡でみつかった土器について文様や形の違いなどから、時期の違いを見分けている。取掛西貝塚の土器をみると、竪穴住居はすべて同時にあったわけではなく、いくつかの時期に分けられることがわかる。



取掛西貝塚のココがすごい! ①

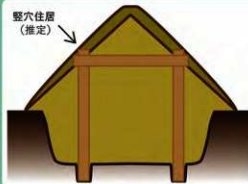
貝塚の下からみつけた・・・ 日本最古の“動物儀礼跡”とは？

取掛西貝塚では、使われなくなった
竪穴住居跡の中で、積み重なった貝殻
(貝塚)の下から、動物の骨を集めて並べ、
火を焚いた跡がみつかった。

これは、“動物儀礼跡”と呼ばれるものと
考えられ、狩りで仕留めた動物の魂を送っ
たり、狩りが続けられるように動物の再生
を祈ったりする儀式をおこなった跡と考え
られている。

取掛西貝塚の動物儀礼跡は縄文時代
早期前葉(約1万年前)のもので、日本国内
では最古のものといえる、とても貴重な事
例だ。

貝塚が守った! 動物儀礼跡



約1万年前の動物儀礼跡
がなぜ現在まで残ったの
か、その流れを見ていこう。

① 最初は竪穴住居があり、
人が住む場所として利用さ
れていた。



② その後、竪穴住居が使わ
れなくなり、その跡地が少し
埋まってできたくぼみを利用
して、動物儀礼が行われた。



③ さらにその後、くぼみに
貝殻が捨てられて貝塚がで
きた。貝塚のカルシウムに守
られて、骨が腐らなくなった。

イノシシの頭蓋骨

シカの角

イノシシの頭蓋骨

イノシシの頭蓋骨4つが
集められている

イノシシの頭蓋骨

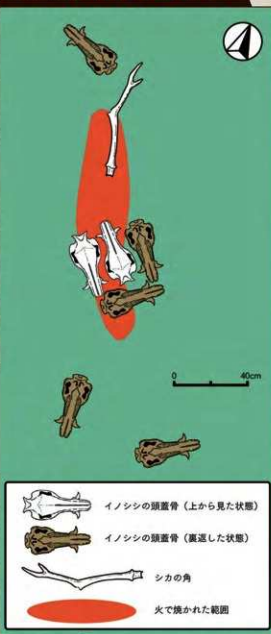
イノシシの頭蓋骨

集められた動物の骨などは、細かい骨をのぞくと、右の図のような
並び方だったようだ。

イノシシの頭蓋骨は7体分あり、火で焼かれているものもある。
イノシシは、大人(成獣)が4体のほか、子ども(幼獣)1体、その中間の
若者(亜成獣・若獣)2体で、年齢はさまざまだ。

シカの角は、火が当たるところに立てられていたようだ。
このほかに、焼けたシカの頭蓋骨などもいくつかみつかった。

動物の骨や角の主な配置



イノシシの頭蓋骨(上から見た状態)

イノシシの頭蓋骨(裏返しした状態)

シカの角

火で焼かれた範囲

動物儀礼跡(南側からみた様子)



動物儀礼跡で出土した骨など



イノシシの頭の骨イメージ図

取掛西貝塚の動物儀礼跡で
みつかった骨が身体のどの部
分かをみていくと、頭蓋骨が多
いことが特徴のようだ。特に
イノシシは、下アゴの骨がない
状態では並べられていた。

イノシシやシカの頭蓋骨の
数に比べると、下アゴや脚、
胴体の骨は少ない。

また、頭の骨のなかでも、特
に硬い後頭部を、わざわざ切り
取ったシカの頭蓋骨があり、目
を引く。



貝塚の断面を横からみた様子(上)と、その拡大写真(下)

約1万年前の竪穴住居跡のうち数軒は、ぶ厚く積み重なった貝殻で埋め尽くされていた。竪穴住居に人が住まなくなったあとに、そこに食べたあとと貝殻や骨などを捨てた跡で、「貝塚」と呼ばれる。



取掛西貝塚でみつかった、約1万年前の貝塚の中身を丁寧に分けていくと、イノシシやシカのほかにキジやウサギ、タヌキなどの動物の骨が出てきた。魚の骨もあり、クロダイ・ボラ・イワシ類・コイ類など、幅広い環境の魚をとっていたようだ。

また、貝塚の中からは、当時使われていた土器や石器などの生活の道具もみつかった。



針(動物の骨製)



貝塚からは、貝殻や動物・魚の骨(食べ物)と土器や石器(生活の道具)のほかに、動物の骨や貝殻でつくられた道具やアクセサリーなどもみつかった。

針は毛皮などを縫うためのものと考えられ、現代と同じ形をしている。貝殻のふちに刃をつけた道具(貝刃)は、魚のウロコなどを取るのに使ったと考えられる。アクセサリー(装飾品)は、サメの歯や貝殻に穴を開けたり削ったりしたもので、糸を通してビーズのように身に着けたようだ。

なかでも、ツノガイという貝で作られたビーズは素材を含め2,000点以上あり、日本国内では最多の量を誇る。これほど大量のアクセサリーが集中する様子を見ると、貝塚のもつ役割は、単なるゴミ捨て場にとどまらないのかもしれない。



ビーズ(ツノガイ製) ↑



ツノガイ標本(参考)



装飾品(サメの歯・タカラガイ製)



貝刀(ハマグリ製)



※イラストは想像図



縄文時代早期前葉(約1万年前)の貝塚(↑)と出土した貝(→)



河口の貝

ヤマドシジミ 2cm

取掛西貝塚では、約1万年前および約6千年前の各竪穴住居跡から貝塚がみつかった。

貝の種類を調べると、約1万年前には河口に棲む貝を主に食べていたのが、約6千年前には海に棲む貝を主に食べるようになったことがわかった。

いったいなぜ、違う種類の貝を食べるようになったのか。また、その違いは、何を示しているのだろうか。



縄文時代前期(約6千年前)の貝塚(↑)と出土した貝(→)



海の貝

ハバガイ シオフキ マカグリ オキアサリ オキシジミ 2cm

約1万年前と約6千年前は、海岸線の位置が現在とはかなり異なっていたようだ。

取掛西貝塚から出土する貝の種類の違いからは、海面が今よりも低かった頃と、もっと高くなっていった頃の環境の違いをうかがうことができる。

約1万年前には海面が今よりも約40m低く、取掛西貝塚からは海が遠かったとみられる。

しかしその後、急激な温暖化により海面が上昇し、約6千年前には今よりも2~3m高くなり(これを「縄文海進」と呼んでいる)、取掛西貝塚の近くまで海がきていたようだ。

約1万年前は、縄文時代としては貝塚がつくられ始めた頃にあたる。貝塚に捨てられた貝殻は、当時の環境を知る重要な手がかりだが、初期の貝塚は全国的にみてもとても少ない。取掛西貝塚は、その数少ない貴重な遺跡のひとつだ。



時期ごとの海岸線の位置と縄文時代早期前葉の貝塚 (日本第四紀学会1987年「日本第四紀地図」を参考に作成)